

大祓神事おおはらえしんじ

「大祓神事」は私たちが日常生活の中で、知らず知らずのうちに犯した罪や過ち、心身の穢を祓い清めるための神事です。

大祓の起源については、日本最古の書『古事記』の中に記述されています。

「国の大奴佐を取り、種々の罪を求めて国の大祓を行い、神の教えを請われた」

これは大祓という名称が初めて古典の中に記されたもので、仲哀天皇が崩御された際に行われた大祓神事の記事です。日本書紀の中でも七世紀末の天武天皇の御代に、国中の罪を祓い清める為、地方の有力者から馬や刀等の祓具を納めさせ大解除が行われたことが記されています。

又、大宝元年（七〇一）に撰修された大宝令の中では法律として宮中の恒例行事の一つに定められています。この様に大祓の「大」は「公」の意味を持つとされ、元々は個人的な祓いではなく国家全体を祓い清める国家的な祭典でした。宮中を中心として行われた大祓神事は、次第に各神社でも行われるようになり、今では神社で行われる大祓神事の方が一般的な認知度は高いようです。大祓神事は、人形・形代・撫物と呼ばれる祓具を用いて祓えを行います。人の形に切った紙で体を撫で、息を吹きかけることによって罪穢を人形に移し、それを祓うことによって自分自身の罪穢が消滅するという方法です。

古来、人形には魂が宿り易いといわれます。実際に現在でも、地鎮祭の際には土地の神様への鎮物しずめものとして人形等を埋めたり、人形を処分するときには人形清祓（供養）を行います。今では見かけなくなりましたが、ひな祭りの際に行われる「流し雛」も元々は大祓と同じ罪穢を祓うための神事の一つでした。この様に私たちの身代わりの役目を果たす人形は、この大祓神事には欠かせない祓具の一つなのです。

古代・中世を通じて行われてきた大祓神事は、平安時代以降、年々衰退していき、応仁の乱以後は全く廃絶してしまいました。しかし明治四年、明治天皇の思し召しにより賢所かしこところの前庭で大祓が行われ、翌五年、明治政府の指令により神宮以下全国の神社で再興されました。これが今も全国で行われている大祓神事なのです。

この大祓神事は六月末（夏越大祓・水無月大祓）と十二月末（年越大祓・師走大祓）の年二回行われます。夏越大祓は厳しい夏を迎える前に、年越大祓は新年を迎える前に行われているのです。罪穢の穢とは「気が枯れる」から由来されています。この「気枯れ」を祓え除く大祓神事はまさに一年の締めくくりにふさわしい神事でしょう。皆様もこの古くからの神事を受けて、気持ちをリフレッシュして新しい年を迎えてみてはいかがでしょうか。